

ダルクスタッフとしての回復： 薬物依存者の「社会復帰」のひとつの形*

南 保 輔

論文要旨

本論では、薬物依存者の「社会復帰」の一例として、ある若手ダルクスタッフの回復の初期の軌跡を描いた。この若手スタッフは、ヴェテランスタッフの姿にあこがれてスタッフとなった。日常業務をこなしながら、利用者のサポートを通じてスタッフとしての経験を積み重ねていた。利用者に昔の自分を見だし、自身が歩んだ回復の道のを振り返り感謝していた。自身の経験を語ることで依存に苦しむ人の助けとなると知り、スタッフとしてやっていく自信を得ていた。回復プログラムの中核である12ステップの学びについては、ようやく軌道にのったところだった。自身の回復像を明確に設定して、スピリチュアルな成長の道を歩み始めたという手応えを得ていた。

キーワード：薬物依存、回復、社会復帰、ダルク、スタッフ

ダルクスタッフの生き方がラクそうに見えた。人生をエンジョイしているようだった。こういう肩の力が抜けた人たちみたいになりたいと思っていた。(Aさん)

1 薬物依存からの回復の形としてのダルクスタッフ

本論は、若手ダルクスタッフAさんを取り上げる。ダルクスタッフとして回復の道を歩み始めたAさんは、ヴェテランスタッフにあこがれてスタッフを志望した。本節では、ダルクスタッフをロールモデルとするAさんの回復初期を描き、調査について紹介する。そして、ダル

ク退寮後にスピリチュアルな成長が課題となっていることを確認する。

1-1 ダルクスタッフとしての回復

薬物依存者の「社会復帰」とはどのようなものだろうか。これが、本論が依拠する一連の研究の主要な調査疑問である。著者たちダルク研究会の調査を通じて、薬物依存者の生活と人生は多種多様なものであることが明らかとなってきた（ダルク研究会 2013）。その「社会復帰（rehabilitation）」もさまざまな形をとっていると思われる。本論では、そのなかでダルクスタッフの「回復（recovery）」に照準する。¹⁾

ダルク（DARC：Drug Addiction Rehabilitation Center）とは、薬物依存者のリハビリテーション施設である。そこでは、薬物依存者が標準で2年間の共同生活を送りながら、依存からの回復をめざしている（ダルクの歴史については、創設者の近藤恒夫が述べている：近藤 1997, 2009）。²⁾ ダルク利用者は、薬物依存から離脱しようとする最初期の段階にいる人たちだ。この人たちにとっては、「クリーン」期間を延ばしていくことが最初の目標となる。³⁾ ダルク研究会では、これまでこの段階にある人びとの生活と人生について調べてきた（ダルク研究会 2013）。⁴⁾

常習的な薬物使用がおさまりクリーン期間が1年を越えるころから、回復のつぎの段階が始まる。「スピリチュアルな成長」と呼ばれるものだ。就労しダルクを退寮しての暮らしが始まる。この時点で、ダルクスタッフの道を選ぶ人たちがいる。ダルクによっては、回復プログラムの一部として入寮者全員をダルクスタッフとしている施設もある。他方、本論で取り上げるXダルクにはそのようなしくみはない。退寮して一般の社会人としての就労・生活経験を積んでからダルクスタッフとなるのがふつうである。⁵⁾

1-2 断薬とスピリチュアルな成長

ダルクの回復プログラムの中核には、NA（エヌエー）の12ステップがある。⁶⁾ 12ステップは、回復のための指針として重視されており、NAがその範としているAA（アルコールクス・アノニマス；略称は「エイエー」）の創始者自身の回復経験をもとに作成されている。⁷⁾

本論では、NAの12ステップを中心とする回復プログラムを前提としている。中心的な事例となるAさんがこれにしたがっているからだ。

このプログラムが中心的に述べられているのが「ベーシックテキスト」と呼ばれるものである (Narcotics Anonymous 2006)。この書物によると、薬物依存者の回復は、大きく2つに分けて考えられる。断薬とスピリチュアルな成長である。回復が「順調に」進む場合、前者が数か月から2年程度の間主として問題となるのに対して、後者はその後生涯続くとされている (Narcotics Anonymous 2006；南 2014)。⁸⁾

断薬とは、とにかく薬物から遠ざかり使わないことだ。ダルクに入寮して断薬する場合、薬物を入手したり使用したりする機会を作らないことがまず優先される。ミーティングに出ているあいだは薬物を使うことができない。外出時に単独行動をしないのもそのためだ。ダルク入寮者は携帯電話の保持が禁じられているが、これには薬物の売人との連絡を絶つねらいもある (南 2012)。

ダルクでは、生活費が毎日支給される。Xダルクでは毎朝2000円が渡されている。食費などはそこから各自が支出する (田代；北村 2015：116も参照)。1万円といった大金を持つと、薬物の購入が可能となる。そのため、余分なお金はスタッフが保管する。高価な買い物をするときにはその都度預け金から出してもらう。これらは、ダルク創設者近藤の経験に基づいている。

AAでは「スリッパ(再飲酒)の心配があるうちは二人以上で一緒に行動するように」とよく言われていたが、その通りだと思う。誘惑の魔の手はいつも身近にあるからだ。

私は誘惑に負けないように金を持ち歩かなかった。外出のときは意識的に五千円以上の金を持ち歩かないようにしていた。シャブ(覚せい剤)仲間のトラックから声をかけられたり、シャブ中の女から頼まれたときに、もし一万円以上の金を持っていたら、トラックのあとを追いかけていたかもしれないし、女の頼みを聞いていたかもしれない。金を持ち歩かないことも依存からの回復のためには重要だとAAの仲間たちが言っていたが、これは事実だった。

薬物依存者にとってクレービング(クスリへの渴望、欲求)をうまくコントロールすることは本当に大変なのだ。(近藤 2009：59)⁹⁾

薬物への強い欲求を渴望(craving、「クレービング」あるいは「クレ

イビング』)と言う (Gorski 1990=2006)。断薬を続けるうちに渴望が少しずつおさまってくる。渴望が生じる頻度と生じたときの強度が減少していく。ダルクでの入寮生活によって薬物依存者は「守られている」。退寮して自立した生活を始めると、自分一人で渴望に対応しなければならない時間が増える。そのために必要となるのがスピリチュアルな成長である。

1-3 ダルク研究会の調査について

著者たちのダルク研究会は、2011年から大都市圏にあるXダルクとYダルクという2つのダルクにおいてフィールド調査を行ってきた。施設を訪問しての観察とインタビューとが主たる調査法である。2011年からの3年間は、入寮者の回復に照準した。14人のライフヒストリーをまとめた(ダルク研究会 2013)のに加えて、あるトピックや数人の事例に着目した論考を発表してきた(平井 2013; 南 2012, 2014; 相良 2013; 山下 2012)。

これらの論考を通じて、ダルク入寮から退寮までの流れはひととおりに見取り図が得られた。そこで、「その後」の解明を第二期調査の目標とし、ダルクスタッフに焦点を当てることにした。

これには2つ理由がある。第1に、ダルクスタッフ以外の形で「順調に」回復している人は少ない。その絶対数が少ない上に、アクセスが困難という理由がある。ダルクを退寮したのちに一般就労して5年、10年とクリーンを続けて回復しているという人はそもそも多くない。これには、定期的にNAミーティングに出席しているという条件がある。そうでなければ「消息不明」となってしまうからだ。そして、NAミーティングに来なくなった人たちのうちの一部が薬物再使用となっていると推測される(もちろん、ダルクスタッフとなっていない回復者もいる。だが、これまでのところ体系的な調査ができていないために本論では取り上げない)。

第2の理由は、ダルクスタッフが回復モデルとしてひとつの大きな存在感を示していることだ。アクセスがしやすいこともある。さらに、第一期調査のデータを活用できるという利点もある。とくに、詳細なライフヒストリーをまとめた14人のなかに、ダルクスタッフが3人いた。2人はわれわれの調査開始とほぼ同時にスタッフとなったBさんとCさ

んであり、もう一人は、われわれの調査期間の終わり頃にスタッフとなったDさんだ。利用者からスタッフへと移行していくプロセスについての情報も得られるというわけだ。ダルク研究会では、これら3人へのインタビュー調査を継続するほかに、XダルクとYダルクのほかのスタッフにたいしてもインタビュー調査に取りかかっている。

Xダルクには、当初3人の常勤スタッフと1人の非常勤スタッフがいた。そこにCさんが加わった。そして、2013年4月からAさんとEさんが新たな非常勤スタッフとなった。他方、Yダルクは最近できた施設である。施設長と無給ボランティアスタッフのBさんとで立ち上げたところに、Dさんが新たに無給ボランティアスタッフとして加わった。

本論では、Aさんを「若手スタッフ」と呼んで、経験の長い「ヴェテランスタッフ」と区別する。Xダルクの3人の常勤スタッフとYダルクの施設長とがヴェテランスタッフである。Aさんが、ロールモデルとしてあこがれたのもこれら4人である。なお、「若手」という呼び方だが、スタッフ経験の長短を指しており、実年齢の違いを反映しているわけではない。強いて言えば、クリーン期間の長さとも関係があると言えよう。

Aさんへのインタビュー調査は、これまでに3回行った。2013年11月と2014年12月、そして2015年5月である。インタビューは許可を得て録音し、すべて文字に書き起こした。ほかに、Aさんが2014年7月にある大学で行った講演も許可を得て録音しデータとした。本論は、Aさんのインタビューを主たるデータとするが、そのほかの調査協力者のインタビューやフィールドノーツなども適宜参照している。

1-4 若手スタッフAさん

本論は、Xダルクの若手スタッフAさんを中心事例とする。Aさんは7年間にわたって引きこもりながら覚せい剤を使用した。逮捕され裁判で執行猶予となったのをきっかけにXダルクに入寮した。順調に断薬して、入寮中に仕事についた。1年10か月でXダルクを退寮して自立した生活を始めた。何度か転職しながら3年ほど働いたが、鬱病となり仕事をやめて生活保護受給となった。精神科病院に通院しながらXダルクのミーティングに通っていた。この間にスタッフになりたいと考えるようになり、やがてXダルクの非常勤スタッフとして迎えられた。本論執筆の時点で2年あまりのスタッフ経験がある。

Aさんは、Xダルク入寮時には、ダルクスタッフには絶対になりたくないと考えていた。「自分みたいな人を相手にするのは、とてもじゃないけどイヤだった」からだ。それが、退寮して社会で3年就労したのちにXダルクに通所しながら見ていると、スタッフの人たちは「クリーンで、しかもラクそうに生きてる」ように見えた。「人生をエンジョイしているようだった。「こういう肩の力が抜けた人たちがみたいになりたい」と思ったというのである。

薬物依存からの回復を体現した生き方を、Aさんはダルクスタッフに見た。薬物を使用しないで、「ラクそうに生きて」いる姿は自身が目指すべき回復の形である。それを、ダルクスタッフという職業、ポジションにいる人たちが実現している。これら先輩スタッフにあこがれて、Aさんはダルクスタッフを志した。まさに、「ロールモデル」としてのダルクスタッフの形がここにある。

以下本論では、ダルクスタッフとしての生活がスピリチュアルな成長、ひいては回復にどのようなつながっているかを論じていく。2節では、ダルクスタッフの業務を概観する。3節では、スタッフ業務がどのように回復につながっているかを検討する。4節は、スタッフになりたいという希望が、ステップ理解の不足から鬱病にかかったという過去の反省を踏まえたものであり、回復のひとつの形を求めたものであることを描く。5節で、回復とスタッフとしてのスタートラインに立っているというAさんの自己認識を示して結びとする。

2 ダルクスタッフという生き方

2015年時点で全国にダルクは70施設ほどある。各施設の施設長はほぼ全員、スタッフでは80%以上が当事者、つまり薬物依存経験者である（「当事者」のほかに「本人」という言い方もよくされる）。

ダルクは薬物依存者による薬物依存者のための組織である。スタッフもかつては薬物依存に苦しんだ。スタッフとなり「先ゆく仲間」としてほかのメンバーの回復をサポートする。「セルフヘルプ（自助）」と「ピアサポート（仲間による支援）」と呼ばれるような原理にしたがって運営されている。薬物依存者が仲間の薬物依存者を支援することは、支援する者にも支援される者にも利点がある。重要なのは、支援される者の

みならず、支援する者にもメリットがあるという点だ。以下において、これらのメカニズムの解明につながるような記述を行っていく。¹⁰⁾

2-1 スタッフの日常業務

本論で取り上げる A さんと同じときにスタッフとなった E さんによると、若手スタッフの一日は以下のような流れだ。出勤は9時半である。出勤簿に押印して、入寮者への対応が始まる。一日の生活費を一人ずつ渡していく。10時からの午前のミーティングの時間帯は、司会が交替でまわってくる。司会を担当しないときには電話番号となる。相談や講演依頼などさまざまな連絡が入る。郵便物の受け取りや集金への対応などもある。午後になると日誌もつける。午後4時をすぎると、翌日わたす生活費の準備をする。勤務時間は午後5時までとなっている。

ダルクの活動と業務は多岐にわたる。入寮者と通所者のサポートが主要業務だが、そのためには組織運営も必要となってくる。本論でそのすべてを網羅することはできない。若手スタッフの回復に関連するものを中心に紹介する。

スタッフになって2年という A さんだが、その業務はしだいに変化してきている。担当する業務の種類が増加したほか、同じ「業務」をしなくても、そのこなし方、そこから得ているものが変化している。

A さんに最初にインタビューしたのは、スタッフとなって8か月目のことだった。その業務についてのやりとりが抜粋1である。

【抜粋1 スタッフの日常業務】¹¹⁾

- R: その、もうちょっとじゃあ今の話を掘り下げて聞くと、なんででしょう。えーっと基本的にはどんな業務をされているんですか。
- A: 今ですか。まず、ミーティングの司会。あとは電話対応。あとはなんだろう、えーっとまあ利用者のかたが病院に行くとかいったら送迎みたいなこととか、あとはイベントというか〇〇山行ったりだとか、どっか温泉行くとかってときの同行するというか、いっしょに行くとか、それくらいかな。(略) まあ、あとは業務日誌みたいなのをわかる範囲内で書いたりですとか、あとはミーティング終わったあとにみなさんの今日の状態みたいなのを書いたりですとか、あとはまあ、ああ簡単な、たまにですけど相談の相手をするときも。

まだ1回か2回しかやったことありませんが。あとは電話のインタークを取るとか、まあそんな程度でまださほどまだ。

[13/11/30 ①回目インタビュー]

スタッフになった当初、ミーティングの司会、電話対応、病院への付き添い、レクリエーションへの同行、そして業務日誌記入とミーティング時の利用者の様子の記録といった業務をAさんは行っていた。これらは、ダルクの活動の中核をなすものでもあるので、すこしくわしく見ておこう。

ダルクのミーティングは、NAの「言いつばなし聞きつばなし」原則に則ったものが中心である。¹²⁾ ダルク利用者は、入寮当初は一日3回のミーティングに出席する。午前と午後はダルクのもの、そして、夜は近くのNAのミーティングに出かけていく。ダルクでのミーティングの司会がAさんの業務である。そして、ミーティングが終わったあとに出席者の様子を観察して記録するというのも行う。

ミーティングの司会は、ダルクスタッフになって初めて経験するわけではない。NA歴やダルク歴の長い利用者が司会をまかされるということがXダルクではふつうに行われている。かつて利用者だったときにAさんにもそのような経験が何度もあった。また、ダルクとは別の組織であるNAのミーティングにおいても、司会を交替で行うということがなされている。

電話対応は、その内容によって難易度に大きな幅がある。取り次ぎや簡単な問い合わせから、深い知識と経験が必要となる相談までさまざま。とりわけ、初めての人の電話相談はむずかしい。ダルクへの入寮を勧めるのか、それとも精神科病院を紹介するのか、といった判断が求められるからだ。自殺の恐れがある人の場合、電話対応によって自殺を食い止められたり防げなかったりということも起こりうる。生死に関わるものでなくとも、電話相談の結果ダルクにすぐに入寮することになったりすれば、断薬、そして回復への道がそれだけ早く開けることになる。

病院やレクリエーションの同行もスタッフ業務の一部である。ダルク利用者は、入寮の初期には単独での外出は極力しないこととなっている。薬物への渴望が強くて、一人になると買いに行ったり使ったりが生じやすいからだ。¹³⁾ そのために、夜のNAミーティングへの行き帰りは、入

寮者がまとまって行動する。病院の場合はそういうわけにはいかない。そこでスタッフが付き添うことになる。もっぱら若手スタッフの担当だ。

2-2 レクリエーション

一日3回ミーティングに出ることがダルク生活の基本とはいえ、ほかにもさまざまな活動をしている。たとえば、Yダルクでは水曜日の午後のプログラムは運動となっている。施設近くの公園に出かけて行って、ビーチバレーをしている。これに同行するのも若手スタッフである。

毎週のレクリエーションのほかに、Xダルクでは月に1回近郊の低山に登っている。夏には海水浴に行ったり、近隣のダルクとソフトボール大会をしたり、バーベキュー大会をしたり、クリスマスパーティをしたりとさまざまなレクリエーション活動をしている。これらに同行するのも若手スタッフが中心である。

スタッフ2年目になると、Aさんに任される業務にも変化が出てきた。最初はただ同行すれば良かったのだが、次第にその準備が業務の中心となってくる。抜粋2は、スタッフ2年目の年末に行われた2回目インタビューのものである。直前にあった近隣ダルクの合同クリスマスパーティが話題となっている。

【抜粋2 レクリエーションのスタッフ業務】

A: ああ、今までたとえば利用者としてクリスマスだとか、その折込に行ったりだとか、その食事に行ったりだとかってことは経験してまずけど、スタッフの立場として、その裏方の部分がけっこう大変だな、気をつかう部分だとか。たとえば昨日も、その、社協折込っていうご存知、

R: ええ。

A: 行きますよね。そうすると、こっちが段取りをして、車で乗せて道覚えて、場所連れてって、そのあとジュース買ってきて、で、人数かぞえてだとかっていうのを、今度やる立場になると、「ああ、いつも楽しんでた部分が、これたいへんなんだな」っていうことをすごく。あと来週行く、そのたとえば、しゃぶしゃぶ食べに行くんですけど、それは事前に何人行くか調べて、で、場所おさえてるのは《スタッフの》Fさんですけど。で、やっぱ引率して、で、食べてっ

で考えると、「あ、仕事なんだな」っていうのはすごく思います、すごく。ですから、こないだクリスマスのときも、やっぱおにぎりは、作ってもらう人、その前に段取りをして、えっと《スタッフの》Eさんと買い物に行って。当日は何人かに作ってもらいながら、僕はお米を研いで、とかってやると、けっこう疲れましたね、たしかに。準備段階で疲れました。

[14/12/20 ②回目インタビュー]

クリスマスパーティには近隣の15ほどの施設から約400人が参加する。食事をしながら、それぞれの施設が演目を披露するというものだ。その食事は各施設の持ち寄りである。この年Xダルクはおにぎりの担当だった。そのためにAさんは、2升炊きの炊飯器で7回ご飯を炊いたという。にぎるのはほかのメンバーがやってくれたが、このような準備はある種のチャレンジで、Aさんも「けっこう疲れましたね」と言っている。

抜粋2では、ほかの2つの場面が取り上げられている。ひとつは、社会福祉協議会のニュースレターの発送準備作業（「社協折込」）である。これは、Xダルクがある地区の社会福祉協議会が発行するニュースレターを折って封筒に入れて、宛名シールを貼るという作業である。2か月に一度出かけていって利用者みんなで作業する。作業場所まではダルクの車で移動するが、道を覚えて運転していくというのがまずひとつ学ぶべきことだった。そして、利用者といっしょに作業をして、終了後にご苦労さんということで缶飲料を支給する。各自の希望を聞いて、缶飲料を自動販売機で買ってきて渡すのも業務だった。

もうひとつが外食への同行だ。ソフトボール大会で優勝したとっては、お祝いにしゃぶしゃぶ食べ放題に行くといったことがなされる。そういうときに同行するのも若手スタッフである。このときは、予約は別のスタッフがしてくれたが、早晩Aさんが担当することになる。予算や人数を考えて適当なレストランを見つけて予約する。そして車で同行して、いっしょに食べて支払いをして連れて帰る。利用者の立ち場であったときには『「ああ、いつも楽しんでた部分が、これたいへんだな』」っていうことをすごく」感じてるということであつた。

Aさんはスタッフを2年間やってきて、ようやくスタッフ業務の「10

分の1」がやれるようになったと感じている。まったくタッチさせてもらっていないのは、会計と役所に提出する書類作成といった業務である。これらはヴェテランスタッフの2人が担っている。その作成には専門知識が必要とされるものだ。そのような作業もこなせるようになってようやく「一人前」になれるとAさんはその日が来るのを待っている。

3 スタッフ業務を通じての気づき

前節では、ダルクスタッフとしてAさんがどのような業務を行っているかをみた。本節では、スタッフ業務、利用者との接触がAさんの回復につながっている面を取り上げる。利用者の姿から昔の自分を思い出し、現在までの変化と回復を実感する。この気づきをもたらしていることについて利用者に感謝するとともに、利用者だった当時、自身をサポートしてくれたスタッフにも感謝する。感謝することで、自己中心的だった考え方も改められるという流れである。

3-1 昔の自分を思い出す

利用者と接していてAさんが感じるのは、「昔の自分」を「フィードバック」してもらっているということだ。「そういえば僕は最初こうだったなとか」、「あーそっかそっか俺もこういうふうやってスタッフを困らせたよなとか」と、利用者の姿から「昔の自分」を思い出すというのである（抜粋3）。

【抜粋3 昔の自分を思い出す】

A: まあいちおう《僕は》スタッフで彼らは利用者なんですが、じつは教わることがじつは多くて、あの、そういえば僕も最初こうだったなーとか、今こんなふうになると、こういうふうにな不安なんだろうなとかっていうのをなにか昔の自分とフィードバックするみたいなところがあって、〇〇君もそうだし、あの△△君とかね、みんな見てるなかで、「あーそっかそっか俺もこういうふうやってスタッフを困らせたよな」とかっていうのをなにかすごく《笑》なんか今返ってきてるような。

[13/11/30 ①回目インタビュー]

とくに印象に残っているものとして、「スタッフを困らせ」る言動が挙げられている（抜粋3）。入寮者がスタッフを困らせ、そのメンツをつぶすような言動をすることがある。Aさん自身も（「俺も」）入寮していたときはそのようなことをした。同じようなことをスタッフとなった今、入寮者たち（〇〇君や△△君）からされている。「なんか今（自分に）返ってきてるよう」に感じている。まさに、自身も「同じ」だったということ強く感じている。¹⁴⁾

3-2 「感謝してます、ありがたいなって」

「昔の自分」を思い出すことが回復にどのようにつながっているのだろうか。これが本論の最大の関心のひとつである。その謎を解く手がかりが語られるのが抜粋3に続く部分である（抜粋4）。それは、一言で言えば回復を実感できるということだ。

【抜粋4 「ありがたいな」と感謝】（抜粋3の続き）

A： でもそれはすごく感謝してます。ありがたいなって。

R： なにがありがたいんですか。

A： なんだろう。その、えーっと、ああ僕もこうやって、なんていうんですか、先ゆくスタッフの人に言ってもらったことによって今があるんだよなとかって。ただ僕は言われたことをそのまま返してるだけなんですけど。あのう当時は、なんだろうな、僕は必死で聞いてたけど、でもほんとにはめんどろくさかったんだろうなとか（笑）ほんとにはイヤだなと思ったんだろうなとかっていうのをちょっと逆に思ったりはします。

[13/11/30 ①回目インタビュー]

入寮者が思い出させてくれる「昔の自分」と、今の自分と引き比べることで、「今があるんだよ」と気づいている。依存に苦しんでいた当時は、クリーン期間が7年となって渴望もそれほど強くない現状。ともすると忘れがちになる当時のことを思い出させてもらって「ありがたいな」と「感謝して」いる。気を緩めると薬物の再使用（リラプス）となってしまうだけに、日々の戒めが重要なのである。

そして、「感謝」は、回復のキーワードである。「自己中心的な考え」

が依存の大きな要因のひとつとされることが多い。他者から与えられたものへの「感謝」は、謙虚さをつくり、これを表現するものである。「先ゆくスタッフの人に言ってもらったことによって今」の状態があるのだから、そのことにも感謝している。つまり、気づかせてくれた今の利用者と、言ってくれた当時のスタッフ双方への感謝である。

このように、利用者から回復を実感させてもらうという「気づき」を得ているだけではなく、Aさんは、スタッフとしての学びも得ている。それは、「僕は必死で聞いてたけど、でもほんとはめんどくさかったんだろうとか、ほんとはイヤだなと思ったんだろうとか」という知見である。

「ほんとはめんどくさ」と感じた主体がだれであるか、抜粋4ではややわかりづらい。これは、当時のAさん自身の心情についての現時点から振り返っての推測である。入寮者であったAさんは当時、「スタッフに言ってもらったこと」を「必死で聞いて」いた。表面的にはそうだったのだが、よくよく考えると、その心中では、「めんどくさ」い、あるいは「イヤだな」と思っていたのだろうと言うのである。

この解釈の根拠として、やや細かくなるが抜粋4の最後の部分が相互作用としてどのように組み立てられているかについての分析を提示しておく。抜粋5がそのトランスクリプトである。

【抜粋5 ほんとはめんどくさかった】¹⁵⁾

- 01 A: .hhh あの : (.) 当時は : ? なんだろうな : ぼくは必
02 死で聞いてたけど [: > あでも <] ほんとは :
03 R: [はい はい]
04 A: めんどくさかったん [¥ だろ : な : とか .hh
05 R: [hhhhhhhhhh
06 A: [ほんとはイヤだな : と思ったんだろうな] : とか ¥
07 R: [h]
08 A: [つてゆうのを] ちょっと逆に
09 R: [はいはいはい]
10 A: 思ったり [は : します.]
11 R: [は い] あ : .

[13/11/30 ①回目インタビュー]

まず第一に注目すべきは、「ほくは」(01行)と「必死で聞いてた」(01-02行)主体を明示したあと、別の主語が言及されていないことである。そのために、「めんどう」や「イヤだな」と思った主体が「ほく」、つまりAさんであると考えるのはもっとも自然なことである。

第二に、「必死で聞いてた」ことと、「めんどう」や「イヤだな」と思ったこととが、表面上と内心は食い違っているという、よくある対比を語るものとして提示されていることが指摘できる。この対比を作るのが「ほんとは」という表現である。「必死で聞いてた」表面は見せかけであって、「ほんと」のことである内心の思いは別である。「ほんとは」を2度繰り返し(02, 06行)ているが、その発話にも特徴がある。「ほんとは:」と2回とも語尾を伸ばして強調を置いている。

その後続く、内心を記述する表現も「めんどうくさかった」から「イヤだなと思った」とグレードアップされている。否定の度合いが強まり、「必死で聞いてた」表面との対比が大きくなっている。そしてだめ押しのように、「逆に」(08行)という表現も事後的に付け加えて、対比をさらに際立たせようとしている。

さらに、「あでも」を早口で差し挟んでいること(02行)も、対比を作る助けをしている。「必死で聞いてた」ことが字義通りのものではないという打ち消しを、「あでも」の早口での挿入は行っている。

上記のような言語形式上の特徴に加えて、このやりとりの参加者であるAさんと聞き手のRがともに、この対比を笑うべきものとして受けとめているということも指摘しておきたい。音声上は、Aさんの発話が「だろ: な:」(04行)と笑い声に転じると、Rが笑い出す(05行)のが同時である。そうだとすると、RはAさんの誘いを待たずに笑っていることになる。「めんどくさかった」という表現が作り出す、「必死で聞いてた」表面との対比だけでも笑うべきものとして受けとめることはできる。だが、Aさんがこの部分の発話をするときにすでに笑顔であり、おかしいことを話そうとしているということを視覚的に示していたということは考えられる。

以上、インタビューを相互作用として分析し、「めんどくさかった」し「イヤだなと思った」のが当時のAさん自身であったとする解釈の根拠を示した。¹⁶⁾このことから言えるのは、スタッフが良かれと思って利用者にたいして行っている言動であっても、利用者の立ち場からすれ

ば、「めんどくさ」と感じたり「イヤだなと思った」りするような面もあるということだ。この知見は、Aさん自身がスタッフとして利用者に対応するときには参照すべきものなのである。

3-3 スタッフとしての成長

スタッフになった当初は相談への対応が苦手だったというAさんだが、2回目のインタビュー時にはうまくいった相談に手応えを感じていた。以下の抜粋6は、「こないだ」応じた相談についての語りである。相談者の「甥っ子」が覚せい剤使用で警察に検挙された。「質問攻め」にされたが、それに答えると相談者は満足して帰っていった。

【抜粋6 「質問攻め」の相談】

A: でこないだ、自分の甥っ子が《薬物使用で検挙された》っていう人が相談きて、まあやってみたら、ああできなくなってるんですけど。その人は質問攻めでしたね。僕が薬物依存だって言ったら、どういうふうに使ったとか、「親はどう思っているんだ」とか、「嫁さんはどうなのか」、「子どもはいるのか」だとか、「仕事したときの履歴書どうやって書いたんだ」だとか、いろんな質問攻めでしたけど、もうすごかったんですけどね。

[14/12/20 ②回目インタビュー]

「質問攻め」ということばが2回出ている。それほど、相談者が一方的に問いかけてきたということだ。それにたいして、Aさんは応じた、「やってみた」。それで相談がうまくいった。「できなくないな」と感じ、スタッフとしてやっていく自信につながっている。

ここに、「セルフヘルプ」と「ピアサポート」のメカニズムの一端を見ることができる。薬物依存者が直面する問題をAさん自身も経験してきた。その経験を人に伝えるということが、依存者（この場合は、依存者親族）の役に立っている。このときの相談者の「甥っ子」がどうなったかはわからない。だが、相談者は「甥っ子」を次回相談に連れてくると帰っていった。

Aさんとの相談を通じて相談者が得たものとして、2つを考えることができる。まず、具体的な知識とノウハウだ。復帰後の職探しのときの

履歴書の書き方がもっとも具体的なノウハウだろう。ほかにも、親子関係がどうなっていくのか、夫婦関係はどうかといったことについての情報も得たことだろう。2つ目として、薬物依存から回復した人間がいるという事実だ。Aさんがスタッフとして応対しているということ、薬物依存からそのレベルまで回復できるという事実に相談者は勇気づけられたことと思われる。¹⁷⁾ さらに、回復のためのサポートがダルクで得られるという点も付け加えることができるだろう。かつて薬物依存であり、回復の道を歩んでいる者としてAさんが相談者に提供できるものは、当事者だからこそのものであると言える。

その一方で、当事者としての経験と知識がダルクスタッフの力の源泉であるとするなら、依存薬物の差異はその制約ともなりうる。とくに、近年若者のあいだで危険ドラッグ使用が増えている。ダルクスタッフには危険ドラッグの使用者は少ない。Aさんは覚せい剤依存であり、危険ドラッグ使用時の幻覚体験などはわからないという。そのために、危険ドラッグ使用者、あるいはその家族からの相談に戸惑うこともある。そうはいうものの、薬物依存者が社会から孤立していくといった現象には共通する部分が多い。そのような共通面を中心としたサポートを心がけるといふ戦略は有効である。

4 回復の形としてのダルクスタッフ

前節では、スタッフ業務がAさんの回復につながっていると思われる面を見た。本節では、AさんのNAの回復プログラムへの取り組みと回復像が、スタッフになりたいという思いとどのようにつながっているかを論じる。

4-1 好きだった「今日一日」

「ナルコティクスアノニマスの12のステップは、私たちの回復のプログラムの基盤となっている」とベーシックテキストの「はじめに」にある(Narcotics Anonymous 2006: xv)。Aさんは、1年10か月のダルク入寮中は断薬を続け、ミーティングにもまじめに出席していた。「プログラム派」と呼ばれるほどだった。とはいうものの、12ステップについては、「いらない」と思っていた。

そのようなAさんだが、「今日一日」ということばは、最初にダルクに入寮して1週間後に知った。「すごく好き」だったという（抜粋7）。

【抜粋7 「今日一日」はすごく好き】

A： あの目標持たないで、今日クスリを使わなければあした考え、使いたければあした考えようっていうあの考えはけっこう好きでしたね。あのことばすごく好きでした。あ、目標たてなくていいんだっていうのをすごく、あのうれしかったですね。

[13/11/30 ①回目インタビュー]

「目標たてなくていい」のは「うれしかった」と言っている。目標をたててそれを追い求めるという生き方がストレスとなっていたことをうかがわせる。ただし、回復プログラムの中核である12ステップについては、「ステップってやれたらステキだけど、俺は関係ないな」と感じていた。「いや俺はいらないよ」というのである。

4-2 できていなかった12ステップ

NAの回復プログラムにおいて、12ステップはその中核を占めている。もちろん、12ステップを通じての回復は「ひとつの形」であり、それ以外の回復の形もある。だが、ダルクは12ステップを重視しており、ダルクスタッフがその教えをどのように受けとめているかはきわめて重要である。

Aさんの場合、ダルク入寮とほぼ同時に始まったクリーン期間は7年を越えている。ダルク入寮中は、12あるステップのうちステップの1から3を徹底的に学ぶことになっている。自身の無力を認め（ステップ1）、ハイヤーパワー（神）の力を信じ（ステップ2）、ハイヤーパワーに身をまかせる（ステップ3）ということである。ダルク入寮中には、ほかの入寮者から「プログラム派」と呼ばれていたことが示すように、Aさんは真面目にミーティングに出席して、プログラムに取り組んでいた。順調にクリーン期間が伸びて、仕事にも就いた。順調に回復しているとAさん自身も考えていた。だが、就労3年で鬱病となって仕事をやめることになった。その後ダルクに通所をして気づいたが、12ステップの最初のものであり、その根幹である、ステップ1ができていなかっ

た（抜粋8）。

【抜粋8 無力を認めていなかった】

A： だけどステップ1の「無力です」とか、あのけっきょく最近わかったんですけど僕クスリに対しては無力認めたんですが、ほかに対してはあんまり無力認めてなかったんだらうなってすごく、それも鬱になってからわかったんですね。

R： ほかっていうのは、ほかに対しての無力の。

A： あの、生き方に対しては結構その、ガツガツやってたというか、
（略）

[13/11/30 ①回目インタビュー]

ダルクスタッフとしての回復の道を歩んでいるAさんだが、最初にダルクから退寮したときには、別の形の回復を求めていると「最近」では考えている。それは、「ガツガツ」した「生き方」だった。本来であれば、クスリの「ほかに対して」も認めるべき、自身の「無力」を認めていなかった。「鬱になってからわかった」と言っているが、そのような生き方が鬱につながったと感じている。

「今日一日」の教えも、「ガツガツ」した生き方の対極にあると思われる。「今日一日」がすごく好きだったというAさんが、生き方に「ガツガツ」していたのは、ステップ1と同じく「今日一日」の教えもクスリについてのみ適用すべきものとして考えていたということかもしれない。

4-3 回復像としてのダルクスタッフ

Aさんにとっての回復はどんなものか。スタッフになりたいとあこがれたときのスタッフのすがたと同じく、「ラクに生き」ることが回復だと考えている（抜粋9）。

【抜粋9 回復とはラクに生きること】

R： その、Aさんにとって回復ってどんなものなんですか。

A： えーっと、やっぱラク、ラクって死ぬって意味じゃなくて、人生が楽しくなることですかね。楽しくなるっていうのは自分勝手に好きなことをやるっていうのではなく、社会のモラルも守れていて、

ある程度秩序も持ってて、それでいてラクそうに生きてる。生きるっていうのが僕の目的ですが、なかなか（なんない）《笑》ですね。

[13/11/30 ①回目インタビュー]

「ラクそうに生き」ることが「目的」だと A さんは言っている。さらに、「人生が楽しくなること」が回復だとも言う。回復の道を歩いていくゴールが「ラクな」生き方というものだ。

A さんの回復像は、A さんが「ガツガツ」した「生き方」の結果鬱病となり、仕事をやめて通所していたときにあこがれたダルクスタッフの姿そのものである。「こういう肩の力が抜けた人たちみたいになりたい」とスタッフになることを希望した。つまり、回復のロールモデルというダルクスタッフの形がここに見られる。

4-4 回復の形としてのダルクスタッフ

あこがれの対象は、一人ひとりの個別の人間である。A さんがロールモデルとしたのも、4 人のヴェテランスタッフのそれぞれであった。そうしたあこがれから志望したダルクスタッフは、職務組織上の役割である。果たすべき職務があり、こなすべき業務がある。3 節で見たように、業務をこなすことを通じて回復が進むという側面がある。薬物再使用をするとスタッフは続けられないという思いもある。単なるロールモデルではなく、回復の形としてダルクスタッフを位置づけるものである。

A さんが、個別のヴェテランスタッフと職務組織上の役割としてのダルクスタッフを分けて考えていたかどうかはわからない。だが、A さんの 12 ステップの取り組みは、このことを考えるひとつの手がかりとなる。

薬物依存者が 12 ステップを学ぶための文献として、長らく翻訳が待たれていた『ステップワーキングガイド』が 2012 年に出版された (Narcotics Anonymous 2012)。A さんはすぐに仲間といっしょに組みはじめた。『ステップワーキングガイド』は 12 ステップを深く学ぶためのワークブックであり、「ある程度こういうのちゃんとやってかないと、僕自身のためにならないな」と思ったからだ。

スタッフ志望を明確にしたのとほぼ同時期に、A さんが仲間といっ

しよに『ステップワーキングガイド』を始めたというのは偶然ではないだろう。ダルクのヴェテランスタッフは、NAの回復プログラムを実践している人たちであり、その生き方が「ラクそう」なのは、回復プログラムを実践してスピリチュアルな成長を遂げているからだとAさんは考えたのであろう。それは、ガツガツした生き方が鬱病につながったという自身の反省とも相通じる。ダルク入寮中に繰り返し学んだはずのステップ1から3だが、Aさんは最初からやり直すことになった。このことは、12ステップの学びとスピリチュアルな成長とが、容易には達成できないものであることを示唆している。

Aさんが、ヴェテランスタッフの「ラクそうな生き方」にあこがれて、「人生が楽しく」「ラクそうに生きてる」ことが回復だと考えたことと、12ステップを学び始めたこととは深く結びついている。NAの回復プログラムをきちんとやることがAさん自身にとって必要であり、ダルクスタッフはそれを実現するひとつの形と考えたのである。

5 回復の奥深さ

本論では、若手ダルクスタッフAさんの業務とそこから得ている気づき、そして、12ステップなどへの取り組みを論じてきた。ダルクスタッフはひとつの回復の形である、Aさんの軌跡はまさにこのことの実験を体現したものであった。

Aさんはダルクスタッフという自身の選択とこれまでの軌跡に手応えを感じている。この回復の形をさらに歩んでいきたいと考えている。本節では、スタッフ業務で気づいた反省点を紹介し、今後もダルクスタッフを続けていきたいというAさんの意欲を確認して結びとする。

5-1 スタッフというおごり

Aさんは、利用者への対応で感じた不満などをミーティングで話せないという苦しみを抱えたことがあった。これはなんとか解決できたのだが、そのときにいろいろと振り返るなかで、自身にスタッフとしてのおごりのようなものが芽生えてきているのを感じた。自分のほうが、回復が進んでいるという優越感だった。それゆえに、「弱い部分」、「ホントの部分」が話せなくなっていたというのである（抜粋10）。

【抜粋 10 「示しが見つからないぞ」】

A： ただ、自分のグループで話せないってのはずいぶんちょっとどうなのかあって、すごく思ったんですよね。あとはその、自分のなかで勝手にこう、スタッフになったから少し、回復してるんだぐらいの気持ちがやっぱ芽生えてるのが自分で気づいたんです。だからその弱い部分をミーティングでは吐きながらも、¹⁸⁾ なんだろうな、もっと弱い部分、ホントの部分っていうのを話せなくなってきている自分に気がついたんですね。「あまりそこまで言っちゃうと、示しが見つからないぞ」ぐらいのこう、思い込みがあったんで。それをちょっと破ろうかなと思って、ただちょっと彼らよりも、ただちょっと先を行っているだけで。まだスタッフになっても2年もたっていないんで。たいして変わらないし、それかっこつけてれば自分がおかしくなるなって最近すごく思ってた。だから疲れてれば「疲れてる」、頭にきてれば「頭に来てる」というのをすこしこう言っていいいんじゃないかなってすごく思ってたちょっと少しラクになったんすかね。

[14/12/20 ②回目インタビュー]

1年あまりスタッフを務めるうちに、Aさんには「あまりそこまで言っちゃうと、示しが見つからないぞ」という思いが芽生えていた。だから、正直になって、ミーティングで話せない（「吐けない」）という状態になっていた。これを「ちょっと破ろう」と思った。「かっこつけてれば自分がおかしくなる」と気がついた。

「おかしくなる」というのは、回復の道からそれるということだ。スタッフとして業務に従事することに付随して生じやすいおごり、これの解消はスタッフとしての回復の道を歩むAさんにとっては常に心がけておくべきことであろう。

5-2 スタートラインに立って

本論では、若手スタッフAさんのスタッフ業務と、それを通じた回復を描き出してきた。ヴェテランスタッフが「ラクそうに」生きる姿にあこがれてスタッフとなって2年、知るべきことの「10分の1ぐらいしかわかってない」と思っている（抜粋11）。

【抜粋 11 スタッフとしてのスタートライン】

A： 名刺をもらうことと、その金庫の鍵をもらうとちょっといっぱしなんじゃないかって思ったんですけど、そんなのは今クリアして、そんなの入り口なんだなってすごく自分でも笑っちゃうんですけど。正直いって今までもうすぐ2年、たぶん10分の1ぐらいしかわかってないと思ってます。もしくはまだスタートのラインに立ってないんじゃないかなって思ってる。その、このスタッフの仕事の奥深さみたいなのをすごく思ってます。なのでちょっと続けていきたいなっていうのをすごく思ってます。

[14/12/20 ②回目インタビュー]

スタッフになるまえには、スタッフとしての名刺を持ち、金庫の鍵をもらうことで「いっぱし」だと思っていた。だが、それは「入り口」にすぎないと今となってわかる。「もうすぐ2年」でようやく「10分の1ぐらい」、「もしくはまだスタートのライン」に「立ってない」のかもしれないと気づいている。「仕事の奥深さ」を痛感している。

本論で述べたように、スタッフとしての学びが多くあり、スピリチュアルな成長への取り組みが始まった。スタッフとしての回復も順調である。「ちょっと続けていきたい」と「すごく思って」いるということである。スタッフの「仕事の奥深さ」の背後には回復の「奥深さ」がある。Aさんの決意は、そのことを見通したものと聞くべきものであるように思われる。

* 本論文は、科学研究費補助金基盤研究（C）25380698「薬物依存者の『社会復帰』に関するミクロ社会学的研究」（代表：南 保輔）の研究成果の一部である。調査に協力していただいたダルクのみなさんに大いなる感謝を表したい。なお、施設名や個人名などは匿名化している。

注

- 1) 「社会復帰」と「回復」の区別について、あるヴェテランスタッフに確認したところ、「社会復帰」とは「回復」の結果であり、「ひとつの形」とのことであった。他方、「回復」は「生き方が変わる」ことという回答であった。

- 2) 「2年間」はひとつの目安であり、かならずしも、すべてのダルクが「2年間」を標準入寮期間としているわけではない。
- 3) 「クリーン」とは、回復のプログラムに取り組むことで、薬物を使用せずに生きること。単に薬物をやめるだけではなく、生きるうえでのさまざまな課題に薬物を使わずに取り組み、人間的に成長していくプロセスを含んでいると理解されることが多い。「クリーン〇年」、「クリーンタイム〇年」というかたちでクリーンの期間を示すこともある（ダルク研究会 2013：373）。

本論の用語解説的な注は、『ダルクの日々』（ダルク研究会 2013）から引用しているが、これは一部『Don't you?—私もだよ』（ダルク女性ハウス 2009）と『回復していくとき』（東京ダルク支援センター編 2002）の用語解説を参考に作成されている。

- 4) ここで断っておくが、本論で取り上げる人たちは全員が男性である。われわれダルク研究会が調査対象としている Xダルクと Yダルクは男性向け施設であり、利用者もスタッフも全員が男性である。
- 5) ある人がダルクスタッフになるのに確立したポリシーや手順があるわけではなく、その時々的重要性に応じてそうなっている。人手が足りない、給与が支給できない、スタッフに欠員ができたなどといった事情である。
- 6) NAは、Narcotics Anonymous（ナルコティクスアノニマス）の略であり、薬物依存からの回復を目指す人びとのための自助グループである。基本的には夜の時間帯に、全国各地で12ステップに基づくミーティングを行っている。ダルクのメンバーも夜は地域のNAミーティングに参加しており、ダルク退所後も地域生活を送りながらNAにつながり続けることが推奨されている（ダルク研究会 2013：368）。
- 7) NAの12ステップは以下の通りである。
 - 1 私たちは、アディクションに対して無力であり、生きていくことがどうにもならなくなったことを認めた。
 - 2 私たちは、自分より偉大な力が、私たちを正気に戻してくれると信じるようになった。
 - 3 私たちは、私たちの意志といのちを、自分で理解している神の配慮にゆだねる決心をした。
 - 4 私たちは、徹底して、恐れることなく、自分自身のモラルの棚卸表を作った。
 - 5 私たちは、神に対し、自分自身に対し、もう一人の人間に対し、自分の誤りの正確な本質を認めた。
 - 6 私たちは、これらの性格上の欠点をすべて取り除くことを、神にゆだねる心の準備が完全にできた。
 - 7 私たちは、自分の短所を取り除いて下さい、と謙虚に神に求めた。

- 8 私たちは、私たちが傷つけたすべての人のリストを作り、そのすべての人たちに埋め合わせをする気持ちになった。
- 9 私たちは、その人たち、または他の人々を傷つけないかぎり、機会あるたびに直接埋め合わせをした。
- 10 私たちは、自分の生き方の棚卸を実行し続け、誤ったときは直ちに認めた。
- 11 私たちは、自分で理解している神との意識的ふれあいを深めるために、私たちに向けられた神の意志を知り、それだけを行っていく力を、祈りと黙想によって求めた。
- 12 これらのステップを経た結果、スピリチュアルに目覚め、この話をアディクトに伝え、また自分のあらゆることにこの原理を実践するように努力した。

(Narcotics Anonymous 2006: 26-27)

- 8) 「スピリチュアルな成長」というのはなかなかわかりにくい。あるダルクスタッフは、「精神的な成長を伴う変化」と言い換えてくれた。
- 9) ダルク創設者の近藤が札幌で断薬に取り組んでいたころは、北海道にNAはなかった。AAのプログラムに基づいて作られたMAC（メリノールアルコールセンター）で近藤は回復の道を歩み始めた。なお、引用中の二重パーレン (〇) は、引用者南によるもの。
- 10) 「セルフヘルプ」と「ピアサポート」、あるいは「当事者研究」といった現象について近年多くの著作が発表されている。これらの先行研究を整理したうえで、本論の議論を粹づけるというやり方もあるが、本論ではそういうやり方は取らない。また、12ステッププログラムが求める厳格な「セルフヘルプ」原理に従うと、ダルクのような施設運営は認められないことになる。この点の議論も今後の課題としたい。
- 11) インタビューなどからの抜粋においては、聞き手Rの相づちなどは略している。二重パーレンは著者によるもの。(言葉)は、「言葉」の聞き取りが確定できないことを示す。抜粋中の引用符 (「 」) の部分は、ある人の口調を模したように聞こえる再演発話 (南 2008) であることを示す。
- 12) ミーティングでは各回ごとにテーマが決められ、それに沿って参加者が自由に語りを披露する。話される内容は、批判を受けることもコメントされることもなければ、原則としてミーティングの場以外に持ち出されることもない (ダルク研究会 2013: 372)。
- 13) 依存物質がアルコールの場合、この対策がとりわけ重要となる。自動販売機が町中のいたるところにあり、アルコールはすぐには買えるからだ。アルコール依存の強い人では、病院入院中に消毒用のアルコールを摂取したという人もいる。アルコール依存者のリハビリ施設であるMACでは、分刻みで団体行動が行われているが、そのような「隙」を作らないためでも

ある。

- 14) 抜粋3の「昔の自分とフィードバックする」という表現の解釈には異論があるかもしれない。「フィードバック」という動詞は、ふつう「と」という前置詞とともに用いられることはない。ここでは、前後の文脈から「昔の自分を思い出させる」と解釈している。原稿確認をお願いしたAさんからは、特にこの部分についての指摘はなかった。
- 15) 抜粋5の凡例は以下である (Jefferson 2004; 西阪 2008: 9-13) :

- [複数の参与者の発する音声が重なり始めている時点は、角括弧 [] によって示される。
- [] 重なるの終わりが示されることもある。
- () 聞き取りが確定できないときは、当該文字列が () で括られる。
- (.) 0.2秒以下の短い沈黙は、() 内にピリオドを打った記号、つまり (.) という記号によって示される。
- 言葉 : : 直前の音が延ばされていることは、コロンの数で示される。コロンの数は引き延ばしの相対的な長さに対応している。
- h 呼気音は h で示される。h の数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している。
- .h 吸気音は .h で示される。h の数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している。
- ≒ ≒ 発話が笑いながらなされているわけではないけれど、笑い声でなされているということもある。そのときは当該箇所を ≒ で囲む。
- .? 語尾の音下がって区切りがついたことはピリオド (.) で示される。語尾の音が上がっていることは疑問符 (?) で示される。
- > < 発話のスピードが目立って速くなる部分は、左開きの不等号と右開きの不等号で囲まれる。

- 16) 「ビデオデータセッション」研究会 (2015年7月19日) において、抜粋3-5のインタビュー部分の詳細な検討を受けた。「ほんととはめんどう」と感じたのが当時利用者のAさんであるとする本論の解釈にたいして、当初は疑義も提起されたが、検討の結果最終的には同意を得ることができた。参加、コメントくださったみなさんに感謝する。また、「ほんととは」ということばで対比をつくり新たな気づきを示す言い方について、Austinの「否定主導語 (trouser-word)」の例であるとの指摘もいただいた (Austin 1962=1984)。

あるものが本当のものである、本当のこれこれである、という主張に一定の意味が付与されるのは、それが本当のものでないかもしれない、あ

るいは、なかったかもしれない、というある特定の可能性に照らしてだけ、可能なことなのである。《略》「本当の」ということばの機能は、何ものかの特徴づけに肯定的に寄与することにあるのではなく、本当でない可能なあり方を排除することにある (Austin 1962=1984: 106。強調は原著者)。

- 17) ベーシックテキストには、「ミーティングでは自分のかつての状態をいつでも見せてもらえる。けれどももっと大事なのは、回復したらどうなれるかも見せてもらえることだ」とある (Narcotics Anonymous 2006: 88)。
- 18) 「吐く」という表現はよく使われる。言にくいこと、たとえば、薬物を使用してしまった、あるいは、薬物を使いたくてたまらないといったこと、をミーティングなどで話すという意味で使われている。

引用文献

- Austin, J. L. 1962. *Sense and sensibilia*. Oxford University Press. = J. L. オースティン. 1984. 『知覚の言語：センスとセンシビリア』丹治信春；守屋唱進訳。勁草書房。
- ダルク研究会. 2013. 『ダルクの日々：薬物依存者たちの生活と人生』知玄舎。
- ダルク女性ハウス. 2009. 『Don't you? —私もだよ：からだのことを話してみました』ダルク女性ハウス。
- Gorski, Terence T. 1990. *Managing cocaine craving*. Hazelden. = テレンス・T・ゴースキー. 2006. 『クレイビングを切り抜ける：薬物依存からの回復のために』麻生克郎訳。Freedom.
- 平井秀幸. 2013. 「承認」と「保障」の共同体をめざして：草創期ダルクにおける「回復」と「支援」. 『四天王寺大学紀要』56：95-120.
- Jefferson, G. 2004. Glossary of transcript symbols with an introduction. In Lerner, G. H. ed. *Conversation analysis: Studies from the first generation*. John Benjamins, 13-23.
- 上岡陽江；大嶋栄子. 2010. 『その後の不自由：「嵐」のあとを生きる人たち』医学書院。
- 近藤恒夫. 1997. 『薬物依存：回復のための12章 DARC10年の軌跡』大海社。
- 近藤恒夫. 2009. 『拘置所のタンポポ：薬物依存 再起への道』双葉社。
- 南 保輔. 2008. 徹子が黙ったとき：テレビトーク番組の相互作用分析. 『コミュニケーション紀要』20：1-76.
- 南 保輔. 2012. 居場所づくりと携帯電話：薬物依存からの「回復」経験の諸相. 『成城文藝』221：158-135.
- 南 保輔. 2014. 断薬とスピリチュアルな成長：薬物依存からの「回復」調査における日記法の可能性. 『成城文藝』227：62-42.
- Narcotics Anonymous. 2006. 『ナルコティクスアノニマス』第5版日本語翻訳版。

- Narcotics Anonymous World Services.
- Narcotics Anonymous. 2011. 『なぜどのように効果があるのか：ナルコティクスアノニマスの12のステップと12の伝統』 日本語翻訳版. Narcotics Anonymous World Services.
- Narcotics Anonymous. 2012. 『ステップワーキングガイド』 日本語翻訳版. Narcotics Anonymous World Services.
- 西阪 仰. 2008. トランスクリプト（転写）の記号一覧. 西阪；高木智世；川島理恵『女性医療の会話分析』文化書房博文社. 9-13.
- 相良 翔. 2013. ダルクにおける薬物依存からの回復に関する社会的考察：「今日一日」に焦点をおいて. 『福祉社会学研究』10：148-170.
- 田代まさし；北村ゼン. 2015. 『マーシーの薬物リハビリ日記』泰文堂.
- 東京ダルク支援センター編. 2002. 『回復していくとき：薬物依存症者たちの物語』東京ダルク支援センター.
- 山下麻実. 2012. ダルクにおける薬物依存からの〈回復〉に関する研究：個人の体験と場の機能に着目して. 東京大学大学院教育学研究科修士論文.

Becoming a DARC Staff Member as a Form of 'Rehabilitation' from Drug Addiction

Yasusuke MINAMI (Seijo University)

yminami@seijo.ac.jp

ABSTRACT

The Drug Addiction Rehabilitation Center (DARC) is a Japanese organization established to support recovering drug addicts. The DARC operates halfway houses in about 70 cities in Japan, and its staff are recovering drug addicts themselves.

Drug addicts typically stay in the DARC halfway houses for two years and then move on to start living on their own. Most of those who have left the halfway houses have jobs in the wider society. Some recovering drug addicts become DARC staff. Mr. A is one of them.

The paper describes the first two years of Mr. A's life as a DARC staff member. He suffered from depression within three years of leaving the halfway house. He later started attending meetings at the halfway house again. There, he was intrigued by DARC's veteran staff and aspired to become a member of staff himself. As a novice member of the DARC staff, his work consists of taking telephone calls and chairing meetings. Daily contacts with drug addicts remind Mr. A of his early days of recovery. His another attempt to learn NA's 12 steps gave him a second chance, thanks to his employment with the DARC. In a word, the veteran DARC staff are seen as "role models" for Mr. A.

KEY WORDS : drug addiction, recovery, rehabilitation, DARC, staff